



ラブレター『第四之書』における《récit》の機能

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鍛治, 義弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00010016

ラブレー『第四之書』における 《récit》の機能

鍛 治 義 弘

フランソワ・ラブレーの『第四之書』は、1548年に11章までの不完全な形で初めて出版され、1552年にはシャチーヨン枢機卿への書簡、新しい序詞、11章までへの大幅な補加訂正、そして12章から67章までが付け加えられ面目を一新して再上梓された。この作品では『第三之書』で予告された、パニユルジュが結婚すべきか否かについて徳利大明神の託宣を得るべく、パンタグリユエル一行が大洋を航海して行く旅物語が骨格をなしている。多くの研究者は、この航海の途中で語られるパニユルジュの羊や嵐や凍った言葉やガステル宗匠などの、これまで見られなかったほど見事に描かれているさまざまなエピソードの寓意・象徴性を解釈することに努力を集中して来ている¹⁾。

しかし、実質的にはラブレーの最期の書物となったこの『第四之書』は、『第二之書パンタグリユエル物語』以来ラブレーが磨いて来た語り方の点でも、当時としては意外なほどの複雑性をみせている。この語り方の分野の研究ではわずかに Keller²⁾、Cholakian³⁾、Coleman⁴⁾、Larmat⁵⁾ などが手をつけているだけである。

こうした物語の語り方について論ずる際には《récit》という語に注意をしなければならないだろう。今日では《récit》とは Genette の著名な定義⁶⁾ によるのが普通だろうが、Keller はその論の中では story, anecdote という区分を用い、『第四之書』に8の story と26の anecdote を認めて

いる⁷⁾。Cholakianもこの区分を踏んで論を進めている。Larmat は Genette の区分にさらに dialogue を加えて分析しているが、彼の場合は Keller のように具体的に récit を指定せず、その定義も非常に曖昧なので、ここでは取りあえずおいておこう。

さて実は Keller の先駆的研究にはいくつかの問題がある。その第1は彼が所謂1次元の語りとそれ以上の次元の語りを区別していないことである。『第四之書』では主筋であるパンタグリユエール一行の航海が登場人物でもある語り手⁸⁾によって語られる。それに対していくつかの話がこの語り手又は登場人物によって語られるのだが、Keller は主筋の中からダンドノーの羊の話だけを story として取りあげる。しかしこのエピソードは航海中のその他の著名なエピソード—嵐や凍った言葉やガステル宗匠のエピソードなど—と区別される理由は、その語り方には全くない。そこで我々は Robert の2番目の定義である元来劇に用いられた定義⁹⁾を援用して、2次元以上の話を《récit》として定義し、以下の議論を進めることにして、1次元の語りについては取り扱わないこととする。

Keller の論の第2の問題は、彼が行なった anecdote と story の区別に関係している。彼によれば、story とは「相対的な実質の長さで充実によって“story”と言いうる語り」¹⁰⁾であり、anecdote は「十分に完備した story ほどの注意を要さず、より短く、著名な歴史上の人物の生涯や経験から素材を取り、細部や会話などによって彩られていない」が、前提となる知識がなくとも読み手や聴き手に味わいうる点で単なる allusion とは異なっている¹¹⁾。つまり量と質で story と anecdote を区別している。その中で比較的単純な長さで登場人物の発話の直接的引用をメルクマールとして、Keller が『第四之書』に認めた八つの story と25の anecdote を検討してみると、必ずしも彼の分類には従えない。長さについてみると、『クワイヤトリスの斧』『パシエの殿様とシカヌウ』『フランソワ・ヴィヨンの復讐』『パンの死』『小悪魔と農夫』はいずれも T.L.F. 版で60行から400行近くにあり、anecdote が概ね20行程度であることから、確かに違いがみられる。し

かし story とされた『石になった犬と狐』は約29行、『ギュイエシャロワの殿』は約18行であり、anecdote のうちの最長の『エドワード王の緩下剤』の約48行よりも明らかに短い。又登場人物の発話の直接的引用の点でも、前の五つの story はいずれもこうした引用があるが、後の二つの story にはなく、却って anecdote とされたものの中に直接的引用がかなりの数ある¹²⁾。確かに先の五つの story は本文中でもそれらの部分を histoire や narration と呼んでいる例もあることからみても¹³⁾、十分に récit であると言えることができる。しかしその他のものについては story と anecdote を明確に分けることは、たとえば登場人物の行動の直説法単純過去形による描写があるかどうか¹⁴⁾を基準にしても、できない。Keller に続いて語りの分析を行った Cholakian もこの点は気づいていたようで、Keller の分類はのせても、検討に際しては区別をしていない。従って我々も以下の分析にあたっては anecdote と story を区別せず、《récit》で一括することにする。

尚こうした基準によれば、Keller が anecdote ととも認めていないいくつかの部分が récit としてあげられよう。Keller は旧序詞を扱っていないようだから、『懸巢と鶺鴒』『ティモンの申し出』の récit がないのは当然としても、第32章の『フィジーとアンチフィジー』が récit に加えられるべきである。

さて前置きが長くなったが、本論文の狙いは、こうした récit がどのような働きをしているのかを検討することにあるのだが、もう少しだけより道をして、『第四之書』の枠組を見ておきたい。Mauzi にならってみると¹⁵⁾、Cholakian もあげたように¹⁶⁾、大枠は次のように図示できる。

第0次元：巻頭の書簡並びに序詞：語り手—フランソワ・ラブレー

第0'次元：第0次元の登場人物がさらに語る物語：語り手—ブリアポス

第1次元：神託を求めての航海物語：語り手—narrateur—《je》

第2次元：第1次元の登場人物たちの語る物語：語り手—バンタグリユエル、ジャン、エピステモン、パニユルジュ、カルパラン、ジムナスト、リゾトーム、narrateur—《je》

第3次元：第2次元の登場人物の語る物語：語り手—バシュの殿様

このように2次元、3次元の *récit* を持つことで、生気が齎され、単一の語り of 単調さを脱して、幾分か of 重層性を獲得するのだが、これらの *récit* はラプレーの物語にあっては、ディドロの『運命論者ジャックとその主人』とは異なり、主筋を混乱させる程のものではなく、また視点の複数性などには至っていない。それでは、これまでの一連 of ラプレーの巨人物語と比べて格段に多いこうした *récit* はどのような働きをしているのか。それが本論の主題である。

récit の機能を検討するに当って我々が考察する *récit* の一覧表をまず掲げておこう。前に検討したように Keller の anecdote と story から『ダンドノーの羊』の story を除き、新たに三つの *récit* を加えたので、『第四之書』では次の36の *récit* を認めることになる。(ローマ数字で章数を記し、括弧内に語り手を入れる。タイトルは我々が仮に与えたものである。)

1. 『ユリアの薄いドレス』巻頭の書簡 (《je》)
2. 『ザカイオス』新序詞 (《je》)
3. 『ヨルダン河の斧』新序詞 (《je》)
4. 『クァイヤトリスの斧』新序詞 (《je》)
5. 『石になった犬と狐』新序詞 (プリアボス)
6. 『パリ風の願を樹てた乞食』新序詞 (《je》)
7. 『懸業と鶉の戦』旧序詞 (《je》)
8. 『ティモンの申し出』旧序詞 (《je》)
9. 『フルニウスの恥かしさ』IV (パンタグリユエル)
10. 『ギュイエシャロワの殿』X (ジャン)
11. 『フィレンツェの食べ物屋』XI (エピステモン)
12. 『アンティゴノスとアンタゴラス』XI (パンタグリユエル)
13. 『ブルトンとギュイーズ公』XI (パニユルジュ)
14. 『バシュの殿様とシカヌウ』XII—XV (パニユルジュ)

15. 『ヴィヨンの復讐』 XIII (バシュの殿様)
16. 『ネラティウスの高価な打撃』 XVI (パンタグリユエル)
17. 『アエスキュロスの死』 XVII (《je》)
18. 『ピレモンの死』 XVII (《je》)
19. 『ヘロデ王の戦略』 XXVI (パンタグリユエル)
20. 『パンの死』 XXVIII (パンタグリユエル)
21. 『フィジーとアンチフィジー』 XXXII (パンタグリユエル)
22. 『ダリウスとスキタイ人』 XXXIV (《je》)
23. 『テュロスのアレクサンデル』 XXXVII (パンタグリユエル)
24. 『ポンペイウスの絶望』 XXXVII (パンタグリユエル)
25. 『アエシリウスと娘』 XXXVIII (パンタグリユエル)
26. 『キケロとポンペイウスの旗印』 XXXIX (パンタグリユエル)
27. 『フレデリック・バルバロッサの条件』 XLV (《je》)
28. 『農夫と小悪魔』 XLV—XLVII (《je》)
29. 『神のおみ脚』 L (ジャン)
30. 『仕立屋と型台』 LII (カルパラン)
31. 『カユザックの競射会』 LII (ジムナスト)
32. 『ディオゲネスの智恵』 LII (パンタグリユエル)
33. 『ジャン・ドリフの結婚』 LII (リゾトーム)
34. 『タルクイヌスの沈黙のメッセージ』 LXIII (パンタグリユエル)
35. 『パントルフェの便秘』 LXVII (《je》)
36. 『エドワード王の緩下剤』 LXVII (《je》)

表から一見して *récit* の語り手に極端な偏りのあることが分るだろう。一次元の語り手《je》の14は別にして、いわばこの物語の主役であるパンタグリユエルが12、ジャンとパニユルジュが二つずつで、その他の登場人物には一つずつしか割り振られていない。このことからパンタグリユエル、ジャン、パニユルジュのこの物語中で占める役割の大きさがまた逆に知られる

し、特にパンタグリユエルに重点が置かれている。

付言すると、語り手の《je》は多くの *récit* を読者を引き合いに出して、対峙して語るのだが、『農夫と小悪魔』の *récit* だけは少し事情が異なる。この *récit* は、『*Pantagruel trouva le cas estrange, et, demandant quelz jeux c'estoient qu'ilz jouoient là, feut adverty que...*』(XLVI, p.190) という部分から分るように、本来的にはバプフィーグ島の農夫がパンタグリユエル一行に語ったものである。しかし先の引用のあと物語はいきなり始まってしまい、農夫が語ったという言葉及は何もない。つまりここでは語り手がいわば全能の語り手として農夫の代りに語るなのであって、《je》の形では出てこない。またこの *récit* は、先の引用の前に出て来た状況の前史にあたり、この *récit* の語りの途中で、その結果が知らされることになる¹⁷⁾。従って他の *récit* が航海物語と時間的・因果的に何ら関係をもたないのとは違っており、むしろ主筋の一部として扱うべきかもしれない。

récit の機能を検討するために、まず次の引用を見てみよう。

J'ay cestuy espoir en Dieu qu'il oyra nos prieres, veue la ferme foy en laquelle nous les faisons; et accomplira cestuy nostre soubhayt, attendu qu'il est mediocre. Mediocrité a esté par les saiges anciens dicte aurée, c'est à dire precieuse, de tous louée, en tous endroitz agreable. Discourez par les sacres Bibles, vous trouverez que de ceulx les prieres n'ont jamais esté esconduites, qui ont mediocrité requis. Exemple on petit Zachée, duquel les Musaphiz de S. Ayl près Orleans se ventent avoir le corps et reliques, et le nomment saint Sylvain. Il soubhaitoit, rien plus, veoir nostre benoist Servateur autour de Hierusalem. C'estoit chose mediocre et exposée à un chascun. Mais il estoit trop petit et, parmy le peuple, ne pouvoit. Il tre-pigne, il trotigne, il s'efforce, il s'escarte, il monte sus un sycomore. Le tresbon Dieu congneut sa syncere et mediocre affectation, se præsenta à sa veue et feut non seulement de luy veu, mais outre ce feut ouy, visita sa maison et benist sa famille. (Q. L., Nouveau prologue, p.15)

Il souhaitoit 以下がザカイオスの *récit* で、場所がイエリコ（ジェリコ）からイエルサレムに変えられているが、新約聖書ルカによる福音書19章1—6節をほぼなぞったものである。もっともラブレールはザカイオスの行動を五つの動詞を使って色づけし、しかも現在形によって生気を齎している¹⁸⁾。この *récit* の持つ機能は引用文中にも使われている *exemple* という語から明らかであろう。つまり、引用前半部の平凡な願いが叶えられることの例としてあげられている。例を単に言及にとどめず、ラブレールの潤色も入られて、我々に物語として語ることで、生き生きと具体的に提示し、ラブレールの物語作家としての才を垣間見せてくれている。『第四之書』の *récit* の中でこうした例示の機能を持つものももっとも多く、こうした *récit* には、今も見たように、*semblablement* (1), *semblable* (27), *exemple* (2, 5, 8, 35, 36), *ainsi* (9, 15) (括弧内は我々のつけた *récit* の番号。以下同様。) などの例であることを示す語の使われていることが多い。

こうした例の収集はエラスムスの『格言集』に代表されるように、古典古代に触れた当時の流行、一種のジャンルであった。奇妙な死の例を集めた *récit* の12や14のように、大部分が古典古代の作家たちの著作、或いはそれらを当代風にアレンジしたエラスムスの著作などから引いて来たものであり、モンテーニュのように自身の経験からとって来たものは少ない。また『第四之書』では単に例としてあげられているだけであって、物語と『エッセー』というジャンルの差もあるのだろう、モンテーニュとは違って、こうした例示をきっかけにして、また反対の意味を持つ例をさらに付け加えたりして、論を発展させるようなこともない。

しかしこうした例示の *récit* をいくつか続けることで、何らかの効果を生んでいる場合がある。*récit* 30, 31, 33は第52章の表題の示す通り、教令集から生ずる奇蹟の話である。とは言っても真の奇蹟の話ではなく、教令集の印刷と紙質の状態から来る不都合な例を集めたものに私には思われる。こうした例をオムナースが教令集に由る罰であるとか奇蹟であるとする姿に滑稽さと諷刺を感じとることができるのではないか。こうして滑稽な例を積み重

ねることにより、またオムナースにそれぞれの例に《Punition, et vengeance divine》や《Miracle, miracle!》という言葉を繰り返させて、一層の笑いをおこさせている。

またこうした例示の話は、本文の主題に沿って、それに適わしいものがとられている。物語終末の第67章で、パニユルジュが恐怖の余り脱糞してしまったことが知られる。ここで付け加えられた *récit* 35, 36は、医学的裏付けはあるかもしれないが、*scatologie* で、滑稽に締め括るに際しては又とないものであろう。

récit の第2の働きを考えるために、またまず具体的に *récit* を引用してみる。

—Je vous diray, respondit Pantagruel, sans au probleme propousé respondre car il est un peu chatouilleux et à peine y toucheriez vous sans vous espiner. Me souvient avoir leu que Antigonus, roy de Macedonie, un jour entrant en la cuisine de ses tentes et y rencontrant le poete Antagoras, lequel fricassoit un congre et luy mesmes tenoit la paille, luy demanda en toute alaigresse: «Homere fricassoit il congres, lorsqu'il descrivait les prouesses de Agamennon? —Mais, respondit Antagoras, ha Roy! estimes tu que Agamennon, lors que telles prouesses faisoit, feust curieux de sçavoir si personne en son camp fricassoit congres?» Au Roy sembloit indecent que en sa cuisine le poete faisoit telle fricassée. Le Poete luy remonstroit que chose trop plus abhorrente estoit rencontrer le Roy en cuisine. (*Q. L.*, XI, pp. 75-76)

—Je dameray ceste cy, dist Panurge, vous racontant ce que Breton Villandry respondit un jour au seigneur duc de Guyse. Leur propous estoit de quelque bataille du Roy François contre l'Empereur Charles cinquieme, en laquelle Breton estoit guorgiasement armé, mesmement de greffves et solleretz asserez monté aussi à l'adventaige, n'avoit toutesfoys esté veu au combat. «Par ma foy, respondit Breton, je y ay esté, facile me sera le prouver, voyre en lieu on quel vous n'eussiez ausé vous trouver.» Le seigneur duc prenant eu mal ceste parolle, comme trop brave et temerairement proferée, et se haulsant

de propous, Breton facilement en grande risée l'appaisa, disant: «J'estois avecques le baguaige: on quel lieu vostre honneur n'eust porté soy cacher comme je faisois.» (Q. L., XI, p. 76)

長い引用になってしまったが、我々が12と13の番号をつけた二つの *récit* で、パンタグリユエルのあとにパニユルジュがすぐ話をして、連続しているものである。この二つの *récit* はその内容はやや似ているものの、語り方や文体などの点でかなり異なっている。

まずパンタグリユエルの *récit* だが、彼の話は全て古典古代に典拠を持っており、この *récit* もブルタルコスがもとになっている。引用文中にも「読んだのを思い出した」とあるように、アベル・ルフラン等の批評版のアミヨによる訳¹⁹⁾からみる限り、ほぼ原典のままである。従って構成は簡潔であり、この *récit* に対していかにもそれらしい結論まで付けられている。また言葉も修飾語句は少なく、複文を多用していかにも堅い調子である。

これに対して、パニユルジュの話は1552年版からの補加で、登場人物からも分るように同時代のものであり、古典に依拠していない。描写はパンタグリユエルのものに比べれば具体的で、*guorgiasement*, *à l'adventaige*, *temerairement*, *facilement*, *en grande risée* などの修飾語句も多い。また結末は笑いを誘う落ちを作っている。会話も区切れが多く、誓言などもあり、実際の会話の調子に近い。

このような違いは一体何を示しているのか。それは *récit* の語り手の性格である。Screech も指摘するように²⁰⁾、『第四之書』では、パンタグリユエルは一貫して古典的教養と宗教心にあふれた賢者でありつづけ、もはや『ガルガンチュワ』の時のように滑稽味は感じられない。一方パニユルジュはと言えば、嵐のエピソードから窺えるように、卑しい恐怖に戦く臆病者という新しい性格を与えられてもいるが、ダンドノーとのやりとりではまだ言葉を操る一種の才を持ったおかしな愚か者でもある。こうした差は Saulnier の言うように直接的発言にも現われているが²¹⁾、*récit* にも反映している。否むしろ、航海中に出会ういろいろなものを描くことに重点が置かれ、登場人

物の行動が以前の物語よりは制限され、性格が発揮しにくくなっている『第四之書』では、こうした *récit* に性格を示す機能を持たせていると言うべきだろう。

この二人の登場人物の性格は他の *récit* でも窺うことができ、パンタグリユエルの場合は *récit* 34が好例となるだろう。この *récit* は先程みた笑いの効果を高めるために集められた *récit* の真中にある。しかし唯一ラエルティウスやエラスムラに典拠を持ち、おかしみはあるものの、それはディオゲネスの機知によるもので、教令集とは何ら関係がない。このようにここでもパンタグリユエルは節度あるユマニスト的態度をよく示している。

一方のパニユルジュはバシエの殿様がシカヌウを如何に退けたかを語っている。(*récit* 28). 1552年版より補加された、この実質を充分備えた *récit* は、批評版の註が示すように²²⁾、取り決めや重要なことの思い出を当事者や証人の精神に強く記すためにお互いをなぐり合う習慣を利用したもので、一読してすぐ分るように大変滑稽であり、言葉の上でもさまざまな工夫が凝らされている。先程みた *récit* 13 よりも描写はより詳しくなり、*cascade verbale*²³⁾とまでは行かないが、よく似た意味の動詞や形容詞を積み重ねたり²⁴⁾、医学用語などを用い具体的なイメージを喚起し過度の精密化によってコミック性を際立たせたりしている²⁵⁾。さらには *demandibulé* (p.90) や *debradé*(p.90)のような新語を造りあげ、*esperruquandutelubelouzeriralu* (p.90) のようなとても長い言葉 (*sesqui pedalia verba* 長ふんどし語²⁶⁾)まで拵え上げている。その他この *récit* には *équivoque* もあり²⁷⁾、音のおもしろさを利用したり²⁸⁾、誓言や罵言も多くみられる。こうした工夫が全てこの *récit* のおかしさを作り出しているとともに、言葉のいわば民衆的な力をも示しており、語り手であるパニユルジュの性格を充分表現している。

さてそれではもう一人の主要登場人物であるジャンについてはどうか。これもまず *récit* そのものを見てみよう。

《Comme, dist frere Jan, à Seüllé les coquins souppans, un jour de bonne feste, à l'hospital et se vantans l'un avoir celluy jour guaingné six blancs,

l'autre deux soulz, l'autre sept carolus, un gros gueux se ventoit avoir guaingné troys bons testons. Aussi (luy respondirent ses compaignons) tu as une jambe de Dieu. Comme si quelque divinité feust absconse en une jambe toute sphacelée et pourrye.

—Quand, dist Pantagruel, telz contes vous nous ferez, soyez records d'apporter un bassin. Peu s'en fault que ne rende ma guorge. User ainsi du sacré nom de Dieu en choses tant hordes et abhominables! Fy, j'en diz fy! Si dedans vostre moynerie est tel abus de parolles en usaige, laissez le là; ne le transportez hors les cloistres. (Q. L., L, p. 207)

この *récit* に見られるのは、いつも食べることを考えており、無知で冒瀆的ですらあるジャンの姿であり、パンタグリユエルの反応も特にこの言葉の使い方の誤りを指摘している。ここに見られるジャンの性格は『第四之書』全体を通じても明らかになっており、また冒頭の *Seuillé* という地名は『ガルガンチュワ』での無知な一種の破戒僧ではあるが、敵の攻撃に対しては立ちあがる勇敢な実行力のあるジャンの姿を想起させる。そしてこの実行力も嵐のエピソードにおいて、特にパニユルジュとの対比でよく表現されていた。このようなジャンが、*récit 27* で、イタリア風の礼儀に対して諷刺的な話をするのは、彼の性格に適っている。

以上見たように、*récit* は主要三登場人物について、そのテーマ上も言葉の点でも性格を示すために用いられている。ジャンやパニユルジュに対するパンタグリユエルの反応をみると²⁹⁾、両者の *récit* は否定的に取られるかもしれない。確かに *Screech* のようにパンタグリユエリを主人公と考え、パンタグリユエルを通して『第四之書』を見るならば、ラブレーの主張をパンタグリユエルにのみ認めるべきなのかもしれない。しかしラブレーの物語は単に主張を展開するためのものではなく、そこには楽しさ、おかしさをも認めるべきであり、少なくとも他の二人の登場人物はこうした要素を担っており、*récit* もこれら登場人物の性格を示すために多いに役立っていると言うことはできよう。

さて最後にもう一つ別の機能を新序詞中の『クワイヤトリスの斧』の

récit を手掛りとして考察してみよう。ラプレーの物語では、序詞はいつも重要な位置を占めており、本篇の内容と呼応していることが多い。『第四之書』の場合も同様のことが認められ、それは何よりも新・旧両序詞の含んでいる récit によって明らかになる。1548年の旧序詞は、まだ愉快的調子で読者の申し出を法廷での三つの用語にたとえ、以前の物語の批判者を非難するにとどまっている。旧序詞の中心である『懸巢と鵲の戦』の話も、文学的トポスに従った、言葉の奇妙な語原を述べているにすぎない。

一方新序詞の中心である『クワイヤトリスの斧』の récit は、もっと深い意味が潜んでいる。この récit は平凡なことを願った者がその願いを叶えられたという例示の récit 2, 3 の続きであり、原典としてアイソポスを持っている³⁰⁾。ラプレーはこの寓話をいつもの豊富な描写でふくらませ、陽物の姿で表わされるブリヤポスに滑稽な話をさせたり、エロチックな対話をさせたり、数字による誇長を行ったりして、全くコミックな調子を与えている。しかし、こういった点を除いても、この récit には、アイソポス、直接の底本とみられるエラスムスの格言³¹⁾、後のラ・フォンテーヌの「寓話」³²⁾と比べて、根本的に異なる点がある。それは失なわれた斧を与えるユピテルの側の態度が描かれていることであり、中でも次のユピテルの言葉はこの récit の機能の解釈に決定的な役割を果たしている。

«Cza, ça, dist Juppiter à Mercure, descendez præsentelement là bas, et jectez es pieds de Couillatris troys coingnées: la sienne, une aultre d'or et une tierce d'argent massives, toutes d'un qualibre. Luy ayant baillé l'option de choisir, s'il prend la sienne et s'en contente, donnez luy les deux autres. S'il en prend aultre que la sienne, coupez luy la teste avecques la sienne propre. Et desormais ainsi faictes à ces perdeurs de coingnées.» (Q.L., Nouveau prologue, p. 26; souligné par nous.)

ユピテルの決定は既になされており、明らかにされており、しかもクワイヤトリスには選択の余地があった。ここに Screech はルターとエラスムス

の論争以来の自由意志と予定をめぐるラプレーの態度をみている³³⁾。つまり、ユピテルは斧を失くした者への一般的な規則を定めている。各人は自由なじかし限られた選択を与えられる。この自由な決定に従って賞罰が決定される。そしてクワイヤトリスは自分の意志（自由意志）で、斧を選んだ。予定された運命の中で働く自由意志のための余地を残しておくために三種の斧が出されたのだ、というものである。この Screech の見解はこの *récit* のあとにみられる予定への言及からも³⁴⁾、妥当なものに思われ、こうした態度がカルヴァンを意識したものであることは、カルヴァンを《les Démoniaces Calvins, imposteurs de Geneve》³⁵⁾という強い非難が他の場所であることから、充分考えられる。

しかし我々の見地からみてより重要に思われるのは、Screech が充分意識せずに用いている *parable* というこの *récit* の持つ雰囲気である³⁶⁾。

Parabole とは元来聖書の四福音書にみられるイエスのおこなったたとえ話のことである。I. Almeida はこの *Parabole* の機能と形態を研究して、*récit-parabole* を「含まれている別の *récit* の登場人物によって語られる *récit*」と定義し³⁷⁾、《虚構性》と《象徴・隠喩的性質》をその大きな特徴としている³⁸⁾。定義の二次元的 *récit* については多くを述べる必要はないだろう。聖書においては、四使徒の語るイエスの言行の物語の中で、イエスその人がたとえ話をしている。また我々が『第四之書』で *récit* と呼んだものも全てこの性質を持っている。Almeida が虚構性というのは、こうした *parabolisation* の効果であって、一次元の物語に対して、アクションの観点からみて二次元の物語が全く外側にあり、二次元の *récit* と一次元の *récit* の内容が全く異質で、干渉がおこらないということである。『第四之書』では『農夫と小悪魔』の *récit* 以外はこの特徴を備えている。しかし、*récit-parabole* の最大の特徴はその隠喩・象徴性にあることは疑いのないことであろう。ただこの隠喩・象徴性は、Ricoeur が「たとえ話は隠喩的過程を物語形式に採用した表現であると定義することができる」³⁹⁾と云うように、物語の形で発揮され、アレゴリーとは異なり、類似は出来事の

次元でみられる⁴⁰⁾。

『クワイヤトリスの斧』の *récit* はこのような特徴を全て備えている。包括性と虚構性については、この *récit* に限らず他の *récit* の特徴でもあった。その上に『クワイヤトリスの斧』の *récit* では、ユピテルのあらかじめの決定に対して、クワイヤトリスが自ら斧を選ぶという出来事によって、自由意志と予定をめぐる論があらわされていたのであった。このように『クワイヤトリスの斧』の *récit* は、単なる例示としての機能ばかりではなく、「たとえ話」的な機能も持っている。

航海物語中の *récit* で、この種の機能を持つと見られるのは、20の『パンの死』と、21の『フィジーとアンチフィジー』である。

『パンの死』の *récit* は、ブルタルコスに起源をもち⁴¹⁾、エウセビウス以来のこの物語の持つ意味の研究が Kraisheimer, Screech らによっておこなわれて来ている⁴²⁾。その意味については、これらの研究に譲るとして、我々は形式上のことを指摘するにとどめよう。つまりブルタルコスの物語に対して、パンタグリユエルがパンはキリストだと自ら解釈を行なっている点であり、これは聖書のたとえ話のあとに付けられるイエススの解釈と符合しているように思われる。

『フィジーとアンチフィジー』の *récit* は一読してその象徴性は明らかであろうが、そのフィジーとアンチフィジーという名前からすると、むしろ中世的な「寓意」性の方が強く感じられる気もする。しかし、ここでも、フィジーとアンチフィジーによって生み出される子供によって、「自然」と「反自然」の結果を象徴する方法は、やはり出来事によって類似をみているのだと考えられよう。尚これら三つの「たとえ話」的な *récit* は古典古代の *mythe* 「神話」⁴³⁾ をキリスト教に結びつけており、ラブレーのサンクレティスムを示すものともなっている⁴⁴⁾。

以上見て来たように、ラブレーは『第四之書』で用いている *récit* を単に例示にとどめるのではなく、主要登場人物の性格を示したり、航海物語のエピソードにみられる象徴性を与えるなどしている。このような *récit* の用い

方は、『第四之書』のいくつかの象徴性に富んだ天才的と言っていい程見事なくいくつかのエピソードと並んで、物語作者としてのラブレアの技倆を遺憾無く表わすものと言えよう。

(1990.10.14)

註

- 1) 凍った言葉のエピソードに関する近年の主なものに限っても以下のような研究があげられる。
V. L. Saulnier, *Rabelais II, Rabelais dans son enquête*, C. D. U. et S. E. D. E. S., ©1982, pp. 115-123.
M. -A. Screech, *Rabelais*, Cornell University Press, 1979, pp. 410-439.
Jerry C. Nash, *Interpreting 'Parolles degelées': The Humanist Perspective of Rabelais and His Critics*, IN: *L'Esprit créateur*, Vol. XXI, No. 1, Spring, 1981, pp. 5-11.
Gérard Defaux, *A propos de paroles gelées et dégelées, (Quart Livre 55-56) "plus haut sens ou lectures plurielles"?* IN: *Rabelais's Incomparable Book*, French Forum, ©1986, pp. 155-177.
Michel Jeanneret, "Les Paroles dégelées 《Rabelais, Quart Livre》, 48-65", IN: *Littérature*, 17, (1975), pp. 14-30.
Jean-Yves Pouilloux, *Notes sur deux chapitres du 《Quart Livre》 LV-LVI*, IN: *Littérature*, 5, (1972), pp. 88-94.
- 2) Abraham Keller, *The telling of tales in Rabelais, Aspects of his narrative Art*, Vittorio Klostermann, ©1963, p. 81.
- 3) Rouben C. Cholakian, *The Moi in the Middle Distance, A study of the Narrative voice in Rabelais*, José Porrúa Turanzas, ©1982, p. 137.
- 4) Dorothy Gabe Coleman, *Rabelais A Critical Study in Prose Fiction*, Cambridge University Press, ©1971, p. 241.
- 5) Jean Larmat, *Formes et fonctions des récits chez Rabelais*, IN: *Cahier de l'Association Internationale des Etudes Françaises*, mai 1978, No. 30, pp. 57-70.
- 6) Gérard Genette, *Discours du récit, essai de méthode*, IN: *Figures III*, Seuil, 1972, p. 72.
- 7) *op. cit.*, p. 31, p. 36.
- 8) François Rabelais, *Le Quart Livre*, Droz, 1947, p. 50sq. 『第四之書』か

- らの引用は全てこの版により, *Q. L.* と略記し, 引用のあと並びに註ではローマ数字で章数を, アラビア数字でページ数を記すことにする. cf. Jean Larmat, *op. cit.*, p. 58. M.-A. Screech, *op. cit.*, p. 323.
- 9) *Dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française*, Le Robert, nouveau tirage pour 1983, Tome V, p. 693. «récit. 2° (Dans la tragédie classique) Exposé détaillé, fait par un personnage, d'un événement important pour le déroulement de l'action et qui n'est pas représenté sur la scène.»
 - 10) *op. cit.*, p. 28. «the narration which, because of their relatively substantial length and fullness, may be designated "story"».
 - 11) *Ib.*, p. 35. «an anecdote does not command the same attention as a full-fledged story, is shorter, takes its material from the lives and experiences of famous historical personages, and is not enriched with details or with conversation; on the other hand, it does tell enough to be appreciated by a reader or listener without prior knowledge, whereas a mere allusion usually presupposes such prior knowledge.»
 - 12) Keller の言う anecdote 26 のうち14にみられる.
 - 13) *Q. L.*, XVI, p. 93. «Ceste narration», XXVIII, p. 136. «Je vous diray toutes fois une histoire bien estrange.»
 - 14) バングェニストによる《histoire》に個有の時制. Émile Benveniste, *Problèmes de linguistique générale*, Gallimard, coll. «TEL», ©1966, p. 239.
 - 15) Robert Mauzi, *La parodie romanesque dans «Jacques le fataliste»*, IN: *Diderot studies*, VI, 1964, pp. 89-132.
 - 16) *op. cit.*, p. 50.
 - 17) *Q. L.*, XLVII, p. 195. «Sus l'instant qu'on nous racontoit ceste histoire, eusmez advertissement que la vieille avoit trompé le Diable et guaingné le champ.»
 - 18) 因みに Lefèvre d'Étaples によるフランス語訳聖書では, 当該箇所は《Et il courut devant: et monta sur ung arbre de sycomer pour le veoir.》とだけ書いてある. Lefèvre d'Étaples, *Le Nouveau Testament*, Fac-simile de la première édition Simon de Colines 1523, Mouton, 1970, Vol. 1, t. iii, r°.
 - 19) *Œuvres de François Rabelais*, Tome VI, *Le Quart Livre*, édition critique publiée sous la direction de Abel Lefranc, Droz, 1955, p. 160, note 30. 以下 édition critique と略記.
 - 20) *op. cit.*, p. 460.

- 21) *op. cit.*, pp. 77-78.
- 22) édition critique, p. 169, note 48.
- 23) 『渡辺一夫著作集』第1巻, 筑摩書房, 1976年増補版, pp. 373-380, 参照.
- 24) 例えば《-Le seigneur de Basché, dist Panurge, estoit homme couraigeux, vertueux, magnanime, chevalereux.》(Q. L., XII, p. 78) など.
- 25) 例えば《à un des records feut le bras droict defaucillé, à l'autre feut demanchée la mandibule superieure, de mode qu'elle luy couvroit le menton à demy, avecques denudation de la luette et perte insigne des dens molares, masticatoires et canines.》(Q. L., XV, p. 89) など.
- 26) 渡辺一夫, 前掲書, pp. 348-354 参照. 「バシユの殿様とシカヌウ」の話には, この他に六つの長ふんどし語がある.
- 27) 《Appellez vous cela jeu de jeunesse? Par Dieu, je n'est ce.》(Q. L., p. 91) など.
- 28) この話の登場人物 Trudon が太鼓をたたく擬音に由来するものである. Edition critique, p. 168, note 45.
- 29) 先の引用の最後の部分並びに, 「バシユの殿様とシカヌウ」の話に対する次の言葉を参照されたい. 《Ceste narration, dist Pantagruel, sembleroit joyeuse, ne feust que devant nos œilz fault la craincte de Dieu continuellement avoir.》(Q. L., XVI, p. 93).
- 30) Esope, *Fables*, éd. Chambry, Belles Lettres, 1967, p. 112.
- 31) Erasme, *Adages*, IV, 3, 57, IN: *Desideri Erasmi Roterodami Opera Omnia*, Tomus secundus, Leiden, 1703, Unveränderter reprographiseler Nachdruck, Georg Olms, 1961, p. 1016.
- 32) La Fontaine, *Fables*, V, 1, Garnier, 1962, pp. 133-135.
- 33) *op. cit.*, p. 331.
- 34) 《Et de qui estes vous apprins ainsi discourir et parler de la puissance et prædestination de Dieu, paouvres gens? Paix :st, st, st; humiliez vous davant sa sacrée face et reconnoissez vos imperfections.》(Q. L., Nouveau prologue, p. 31).
- 35) Q. L., XXXII, p. 152.
- 36) *op. cit.*, p. 330. 《All this is told in a spirit of comic parable, by which religious insights are provided by unexpected means.》
- 37) Ivan Almeida, *L'opérativité sémantique des récits-paraboles*, Cerf, 1978, p. 2. 《Le récit-parabole est défini suivant des critères formels (en tant que récit prononcé par un personnage d'un autre récit englobant le premier)》.

- 38) *Ib.*, pp.117-121 と Ivan Almeida, *La structure conversationnelle de la parabole*, IN: *Parole-Figure-Parabole*, sous le direction de Jean Delorme, Presses Universitaires de Lyon, 1987, pp.66-67.
- 39) P・リクール, E・ユンゲル『隠喩論—宗教的言語の解釈学』麻生建・三浦國泰訳, ヨルダン社, 1987年, p.101.
- 40) Michel Le Guern, *Parabole, Allégorie et Métaphore*, IN: *Parole-Figure-Parabole*, p.34.
- 41) Jean Plattard, *L'œuvre de Rabelais*, Champion, 1967, pp.291-294.
- 42) Alban J. Krailsheimer, *Rabelais and Postel*, IN: *B.H.R.*, T. XIII, 1951, pp.187-190. M. A. Screech, *The death of Pan and the death of Heroes on the Fourth Book of Rabelais*, IN: *B.H.R.*, T. XVII, 1955, pp.36-55.
- 43) 『フィジーとアンチフィジー』の *récit* は実際は同時代人の Coelius Calcagninus の作品からとられたものであるが, パンタグリユエルは「昔の寓意者作者たちから読んだこと」にしている.
- 44) 『フィジーとアンチフィジー』の *récit* では, アンチフィジーから生まれたものとして, 《les Demoniacles Calvins, imposteurs de Geneve; les enraigez Putherbes》(*Q. L.*, XXXII, p.152) などがあがっており, カルヴァンやパリ大学神学博士ガブリエル・ド・ピュイ・エルポーが反自然なものとして攻撃されている. cf. Screech, *Rabelais*, p.371.

Les fonctions des «récits» dans le *Quart Livre* de Rabelais

Yoshihiro Kaji

Nous avons examiné les fonctions des «récits» dans le *Quart Livre* : «récit» dont la définition nous donne le Robert, c'est-à-dire le narration en seconde et troisième instance. Nous y constatons 36 récits (inclus deux récits dans l'ancien prologue.) La plupart de récits sont utilisés comme exemple, qui était un genre littéraire en vogue. Rabelais emploie l'exemple propre au sujet, et il accumule les récits drôles au cas du miracle des décrets pour augmenter l'effet comique.

En outre, on peut discerner les caractères de trois personnages principaux, Pantagruel, Panurge et Jean, à travers quelques récits. Les récits du bon saige Pantagruel ont toujours la source classique avec le style concis. Le couard et bavard Panurge raconte avec beaucoup de verve les récits facécieux pleins de procédés verbales. Dans les récits de Jean on sent son caractère ignorant et blasphématoire mais courageux.

Enfin trois récits fonctionnent comme récit-parabole au sens que définit Almeida : «récit prononcé par un personnage d'un autre récit englobant le premier» et qui a la nature «fictif» et «symbolico-métaphorique». Par exemple par le récit de Couillatris et sa cognée perdue nous sommes devant le destin de l'homme face au libre arbitre et à la prédestination.

Ainsi Rabelais déploie son talent de conteur même dans le domaine des récits.